北高生よ、信念をもって

同窓会会長　安部志朗

右腕に死球を受けたリチャード・デービス（当時近鉄）は激高し、バットを放り投げ、マウンドに駆け上がった。そして相手投手の顔面を一発二発と素手で殴り、挙げ句の果てに蹴りまで入れたのだ。

もはや野球の試合ではない。両軍ベンチから一斉に選手達が飛び出し、まさに大乱闘である。デービスは即退場を命じられた。一方、投手の方はタオルで傷の部分を拭ったあと、また再びマウンドに立ち勝利投手になった。東尾修である。ベテラン投手の貫禄勝ちである。昭和六十一年六月十三日の西武球場での事件だった。

今では、試合中の乱闘や審判との小ぜりあいなどはあまり珍しくはなくなったが、当時は珍しく各マスコミが争ってその事件を大きく取り上げた。それは「絶対に暴力は許されない。」というデービスを非難するものが大半である。現に、デービスにはその試合後、パ・リーグ会長から出場停止十日、罰金十万円というペナルティーが科せられている。

ところが、数日後、新聞各紙の論調が一変する。それは、東尾の投球方法を疑問視する内容だった。現役時代の東尾は打者の胸元をえぐるシュートボールを持ち味としており、そのせいか打者に与えた死球もかなりのものだった。「暴力はいけない。しかし、デービスの行為も理解できなくはない。」「今回の事件は東尾の投球に起因しているのではないか。」パ・リーグの西武以外の球団の監督や選手らが、マスコミを介してデービスを擁護し、東尾を批判し始めたのである。

十七日、久しぶりに西武球場付近の練習場に入った東尾は、報道陣にもみくちゃにされ、フラッシュの放列を浴びた。そして彼は毅然とした態度でこう叫んだ。

「おれの投球法はかえない！」

これでいいのだ。これこそまさに東尾の信念である。たとえ敵陣から誹謗中傷を受けても、またマスコミから叩かれても、東尾は決して自分の信念を曲げなかった。もしも罵詈雑言の重圧に負けて安易に己の投法を変え、打者に迎合するような選手になってしまったら……。おそらく、大投手として名を残すことはなかったことであろう。また、あのとき以上の彼の信念と闘争心こそが、監督就任後、西武ライオンズを二度のリーグ優勝に導いたのだと私は確信している。

二十周年という節目を目の当たりにした北高生のみなさん、強い信念をもって今後の人生をがんばってください。